ナイトメア

藤森　凛

　皺もしみもない、陶器のような肌がライトの下で輝いている。

筋肉の均整が取れた、長い脚をポールにからませて女は大きく仰け反って見せた。

彼女お得意のポーズに、観客からは大きな拍手が湧きあがる。

　亜麻色の髪が軽く波打って、小顔な彼女の顔を縁取り、桃色の唇が妖艶な笑みを漏らす。

豊かな胸を包んだ黒いサテン生地の衣装は、若い青年には刺激的なほど短い。女が振り返ると、誰もが大きく開いた背中に釘つけになる。

身体のどの部分を見ても彼女は抜群に美しい。ライトを吸収したように輝く瞳、黒々と濡れた睫毛、整った鼻梁、柔らかそうな唇。豊満な胸に抱きしめたら折れてしまいそうにくびれた腰、色気の漂う長い足。

彼女の美しさは、この世界の常識を覆すほどだった。世界中どこを探しても、彼女以上に美しい生物はいないだろう。

　観客たちが、いくら手を伸ばしても届かない場所で彼女は舞い踊っている。

　友人から誘われて、年若い青年は初めてこの劇場にやって来た。田舎から大学進学のために上京してきたばかりで、都会について何の知識もない純朴な青年である。

最初は裸になっていく踊りを見せる女性のダンスを見て、思わず逃げだしそうになったが彼女を一目見て彼は動きを止めた。

こんなに美しい女性を見たのは初めてだった。動きも声も全てが彼を魅了した。

極めつけは最期に彼女が投げた、薔薇の花が彼の手に落ちた時だった。

若い青年は満面の笑みで薔薇を掲げ上げ、彼女は応えるように微笑んだ。確かに、彼だけに向けられた微笑みに青年の心は完全に持っていかれてしまった。

　共に来た友人に呆れられながら止められても、彼はどうしても彼女と話したくて店の裏口で身を潜めた。彼女は売れっ子だから、警備が厳しいぞと言われても諦められなかった。寒さに身を震わせながら彼はじっと耐えた。

下駄を履いてきた事が恨めしくなるぐらい外は寒い。ほろ酔い加減の中年たちが大勢帰っていく。中には青年と同じように下駄の者もいたが、酔いのおかげで寒さを感じていないらしく、ご機嫌で歌を口ずさんでいる。

　歌の節を青年は一緒になぞった。軍歌であることに気がつくのに時間がかかったのは、寒さで頭がぼんやりとしていたせいだろう。

一目ぼれした女性を待つ時に歌うには雰囲気がない、青年は苦笑した。

「きれいな声ね」

　凡庸なもの全てを消し去ってしまうような、力強く耳に響く声がして青年は金縛りにあったように、一瞬動けなくなった。

意志の力で、何とか振り返ると真黒な毛皮のコートを着た彼女が立っていた。闇と同化したみたいに、顔だけが浮かび上がっている。

「僕は……あ、あの……貴方に会いたくて」

「会っているわ」

　青年は頭をかいた。彼女に会いたくて待ち続けたが、何を話すかまるで考えていなかった。

「あなたと、もっと一緒にいたいと思って……僕は初めて貴方を見てからずっと綺麗な人だと……ええと、つまり僕はあなたのことを知りたいんです」

　我ながらとんでもない醜態を晒しているのは分かっていたが、背中を向けて逃げ出すには、彼女に未練がありすぎる。

「私とずっと一緒にいるのは無理よ。あなたが本気でそれを望まない限り」

「ぼ、僕は本気です！」

　黒い手袋をはめた手が伸びてきて、彼の頬を撫でる。何故か、鳥肌がたち彼は言い知れようのない恐怖感に襲われた。これだけ美しい女性と向き合った経験がないせいかもしれない。

「嘘。あなたは本気じゃないわ。いつか分かることよ」

　有無を言わさぬ彼女の言葉に彼は黙りこんだ。背中を見せて彼女が完全に闇へと消えて行っても、彼は動けず立ち尽くした。

　それから、彼は劇場に通い続けた。時には生活費を切り詰めて花束を贈ったり、苦学生の限界を示すささやかな贈り物をしたりした。

　しかし、彼女の予言通り、彼は定食屋で働く別の女性に心を惹かれ、次第に劇場へ通う回数が減った。

彼女はどんな女性よりも美しかったが、それは夜空に輝く月の美しさであり、決して手に入れることが出来ない。

青年は道端に咲く可憐な花の美しさを選んだ。

それは、青年が見てしまった恐ろしい光景もいくらか関係していた。彼は二度と思い出すまいという誓いと共に、妻をめとった。

　昭和初期の出来事である。

　月日が流れて平成の世。

　皺もしみもない肌を求めて、恵理子は自分でも止められないほどに散財していた。

事務職で貰える給料の大半を美容品に注ぎ込み、生活の中心に美容がある。

小学生の頃から周囲にもてはやされてきた美貌が衰えてきたことを、三十四を迎える彼女は鏡を見る度に痛感している。

　いや、本当は最近入社してきた後輩・ゆりのせいであることは分かっているが認めたくなかった。ゆりが入社してくるまでは、恵理子は社内で一番の美人だった。彼女より年下の女性はたくさんいたが、恵理子の美貌の前では年齢など無意味だった。

　そう思っていた恵理子の自尊心はゆりの出現によって、みじめな程に砕かれた。

「内村　ゆりです。よろしくお願いします」

　男を意識した甘ったるい声で、ゆりは頭を下げてから魅力たっぷりに微笑んだ。自分の器量を十分に理解した上での立ち振る舞いが、恵理子を苛立たせた。

第一印象から、恵理子はゆりが嫌いだった。二十二歳の輝かんばかりの若さはあっという間に男たちを虜にした。恵理子だって同じ二十二歳だったら、ゆりに勝つ自信がある。

　しかし、現実は十二歳の年の差があった。越えられない年齢の壁の前に恵理子は破れた。今まで彼女に声をかけていた男たちは、あっさりと若い女に鞍替えしてしまった。

　しかし、現実は十二歳の年の差があった。越えられない年齢の壁の前に恵理子は破れた。今まで彼女に声をかけていた男たちは、あっさりと若い女に鞍替えしてしまった。

　改めて恵理子は鏡を覗き込む。同年代の女性よりは、遥かに綺麗な顔をしていると自分で思う。努力をしているし、美しくなるためならお金は惜しまない生活をずっとしてきたのだ。同じであるはずがない。

　だが、二十二歳の女に勝てるほど恵理子の肌に昔のきめ細やかさはない。

目元に疲れが現れるようになったし、肌がくすんできたし、目じりと口元の皺が気になるようになってきた。どんなにお金を使っても隠しきれない年齢が顔に現れてきている。

若い頃は努力しなくても張りのある肌だったのに、今ではスキンケアに何時間もかかるようになった。睡眠時間を削ってスキンケアをして、寝不足になり肌が荒れるという悪循環を繰り返していたが、ゆりについて考えると何かせずにはいられない。

自分でも病的だとは思うが、止められない。どうしても、あの自分を男に売り込むことが上手な小娘には負けたくなかった。

　会社でゆりに会う度に苛立ち、焦燥感に駆り立てられるストレスで、肌が荒れているに違いない。恵理子は深いため息をついた。

　ゆりが現れなければ、私は一番のままでいられたのに。

　虚しい嫉妬ではあるが、恵理子は本気でゆりを退社させる方法を考える時がある。

通勤電車の中で周囲を見渡すと、視線は否が応でも若い女性を捉えている。何もしなくても張りのある肌が、輝く髪が、血色の良い唇が妬ましい。

　恵理子にも若い時代があった。そして若い時の彼女は誰よりも美しかった。ゆりにも、同じ電車にいる若い女たちの誰にも負けないだろう。

　叫んでみたところで、全ては過ぎ去ってしまった時代の話だ。恵理子は頭を抱えた。

頭の中で、今月の給与からどれぐらい美容品やエステにかけるかを計算した。

もっと美しくありたい、少しでもいいから若返りたい、恵理子は何度も呟いた。

　疲れ切った恵理子が出勤していくと媚びた声を出しながら、ゆりがお茶を配っている最中だった。女性社員にお茶くみをさせる昔の風習は、この会社にはないのだが、ゆりは自主的に行っている。それがまた、恵理子のカンに障った。男どもに媚びるのが目的なのは、不必要なほど長い会話を聞いていれば分かる。

「え、鈴木先輩ってサーフィンするんですかあ！かっこいいですね、今度私も連れて行ってください」
「課長、今日のネクタイ、良い色ですね。え、ご自分で選んでいるんですかあ？センスいいんですね！」
「あ、西村先輩、昨日はありがとうございました！あのお店のランチ最高でした。また連れて行ってくださいねえ」

　不愉快なほど男たちに甘えた声を出しては、軽いボディタッチをするゆりの姿に恵理子の苛立ちはさらに強まる。許されるなら、あの女が抱えているお茶を全部顔にかけてやりたかった。

「おはようございます、高橋先輩」

　胸元をちらつかせる薄黄色のチュニックが恵理子の視界に入る。ここは職場であって、合コン会場じゃない。仕事をする意欲の欠片もない短いスカートを見ながら、恵理子は苛々と机を長い爪で叩く。

「その服、可愛いけど胸元見えすぎじゃない？」

　チクリと釘をさすと
「高橋先輩、申し訳ありません！私、先輩の気分を害すつもりなんて全くなくて」

　不必要なほどに張り上げたゆりの声がフロアに響く。わざとらしいぐらいに声が震えている。だが効果は抜群だったようで、途端に周囲から冷たい視線が恵理子に注がれる。

「おい、高橋くん。内村くんはまだ新人なんだから加減してやってくれよ」
「そんなにキツいと結婚出来ないぞ」
「内村はまだ若いんだからさ、高橋が大人に対応しないと」

　方々から男たちの声が上がる。お盆で顔を隠していても、涙目であるゆりの口元が笑っているのが分かった。

カッとしてゆりを突き飛ばしたくなったが、かろうじて自分を抑えると恵理子は微笑んで周囲に笑ってみせた。

「すみません、私ったら」

　ふふ、と愛想笑いをしながら恵理子は机の下で床を蹴った。

　ゆりが淹れたお茶には口をつけず、すぐにパソコンの電源を入れると社内メールを開いた。社内には関係を隠しているが、学生時代から付き合っている彼氏の敬がいる。以前からゆりについて腹の立つことがあると真っ先に敬にメールをして鬱憤を晴らしていた。

その度に敬が「恵理子の方が綺麗だよ」とか、「俺は恵理子の方が好みだ」という言葉を送ってきてくれるので、恵理子は素直に嬉しかった。

やはり、敬は自分に相応しい、大人の男だ。あんな小娘なんかに惑わされる他の低俗な男たちとは違うのだ。

敬は高校時代から目立つ容貌で、実家が裕福で、運動も出来る完璧な男で恵理子の自慢だ。恵理子が美しいからこそ、手に入れることが出来た『優良物件』なのだ。

　一通り怒りをメールに書くと、少しだけ恵理子の胸は軽くなった。味方がいると思うだけで心強い。しかも周囲が羨むほどのいい男が自分を想ってくれている。

　メールを送信し、お茶を捨ててコーヒーを淹れようと立ち上がると、奥のフロアで見覚えのある背中が立ち上がるのが見えた。

（敬！）

　急にわくわくした気持ちになって、恵理子はそっと敬の後を追った。周囲に知られると色々面倒だが、今日ぐらいは敬に甘えてもいいだろう。

勝手にそう決めて恋人気分を味わおうと、恵理子は敬が姿を消した角を曲がろうとしたが、信じられない声を聞いて立ち止まった。

「ごめん、ゆり。待たせたかな？また恵理子からメールがあってさ」

「ゆりの悪口をたくさん書いて送ってくるってやつだね。敬も大変だね」

　敬？ゆりが敬を呼び捨て？

　恵理子の足もとがぐるぐると回転していく。黒い渦が足もとから恵理子を飲み込んでいく。

「あんな性格の悪い女性だとは思わなかったよ。ゆりも苦労してるな。虐められているんだろう？」

「今日は服装を怒られちゃったの。ゆり、短大出たばかりでよく会社のこと分からなくて」

「俺が教えるから気にするな。近いうちに恵理子とは絶対に別れるから、ゆりは安心して今のままでいていいんだよ」

　別れる？私と敬が？

　聞きなれたはずの優しい敬の声が、まるで他人の声のように耳に響く。学生時代からの付き合いの私を捨てて、出会ってまだ半年の小娘を選ぶ？敬が？

「高橋さん、課長が呼んでますよ」

　いつの間にか、後輩の女性が背後に立って、廊下に立ちつくした恵理子を不思議そうに見ている。

角から敬が真っ青な顔で現れて、恵理子を見た。真っ青な顔は真っ白な顔へと変化した。恐らく、恵理子はとんでもない顔をしていたのだろうが、それは立ち聞きしてしまった会話のせいばかりではなかった。

敬の背後で、ゆりが笑っていた。蔑みと嘲笑の眼差しを恵理子に注ぎながら。

　どうやって一日を過ごし、帰りの電車に乗り込んだのか恵理子には記憶がなかった。

いつものように混んでいる電車の中で、人ごみに押されるがまま恵理子は流された。

激しい怒りの後にやってきたのは、絶望だった。虚脱感に襲われ、目の前が暗くなる。

自分は敬に捨てられ、よりもよってゆりなんかに自分の男を盗られたのだ。周囲に散々自慢してきた、私の美しさで勝ち取ったいい男を。

　若さ？若さなの？

結局、最後に勝つのは若さだというのだろうか。それなら自分が今まで生きてきた意味は何だったのだろう。過ぎた年月の分だけ容姿が衰えるなら、産まれてきた意味などない。

　ぐらついた足取りで恵理子は電車から降りた。果たして自分の降車駅なのかどうかも分からなかったが、もうどうでもよかった。どうにでもなれ、やけっぱちに歩を進めていると急に前が明るくなり、恵理子は顔を上げた。

目の前に、遊園地の入り口があった。七色のネオンがアーチの上で光り輝き、ＷＥＬＣＯＭＥという文字が、目が眩むほどの明るさで点滅している。

　こんなところに遊園地なんてあったかしら？

　恵理子は首を傾げたが、そもそもどの駅で降りてどうやって此処まで歩いてきたのかすら定かではない。

（よく分からないけど、遊園地に来ちゃったんだ）

　デートの定番である遊園地に来てしまったことが恨めしくて、恵理子はすぐ立ち去ろうとしたが足が動かない。

魅せられたように恵理子は光り輝くアーチを眺める。

（少し気晴らしでもしていこうかしら）

　どうせ帰っても誰もいない、真っ暗で孤独な部屋があるだけだ。恵理子はアーチをくぐって、中に入った。

　中に入ったと思った瞬間、恵理子は白い扉の前にした。木製の白い扉は清潔感があり、触るのが躊躇われるほど神々しい。

（どうして扉が？私は確か遊園地に入ろうとしたはず……夢でも見ているのかしら？本当はまだ電車の中にいるのかもしれないわ）

　扉を開けようとすると
「まだそっちには行けないわ」

　凡庸なもの全てを消し去ってしまうような、力強く耳に響く声がして恵理子は金縛りにあったように、一瞬動けなくなった。

　慌てて振り返ると、亜麻色の髪を肩に流した美しい女が立っていた。真黒なドレスから覗く白い足が、女の若さを示している。

　紫色の唇は少々不気味だが、黒々とした睫毛、パープルのアイシャドウで縁取ったアーモンド型の瞳、整った鼻筋、豊かな胸、抜群の色気と美しさを纏った女に恵理子は言葉を失った。

こんな綺麗な生物がこの世に存在するはずがない、無意識に恵理子は思った。

　足音もなく女が恵理子の前と歩いてくる。

「どんな夢をお望み？永久の若さ？永久の自由？何でも叶えてあげるわ」

「何でも？本当に何でも？」

「ええ、何でも。若さでも自由でも愛でも死でも」

　非現実な空気が恵理子の理性を狂わせる。頭の中で、自分を嘲笑したゆりの顔が、敬に媚びた声を出すゆりが、周囲を味方につけて恵理子をいたぶるゆりの姿がめまぐるしく回転している。ゆりさえいなければ、周囲から孤立することも、社内で一番の座を奪われることも、敬に捨てられることもなかった。あの女さえ私の前から消えてくれたら全てが元に戻るはずだ。

　散々、自分を馬鹿にしたあの女さえ消えるなら。

　今、自分が望むことなどひとつしかない。

「あの女を、ゆりを殺して！あの女の泣き叫ぶ顔が見たいの！それが私の夢よ！」

　自分の身体から発せられたとは思えない、醜くドスの利いた声が耳に響く。ありったけの憎しみが自分の身体から溢れだして抑えられない。

　女の紫に縁取られた瞳がわずかに動いた。

「あなたの夢はゆりという女の死？」

「そうよ！あの女が死んで、私だけが美しいまま生き残ることよ！」

　敬を誑かしたあの女が、私を苦しめるあの女が、私をより若いあの女が憎い！憎い！憎い！憎い！憎い！

　紫色の唇が目の前にあったと思った時には、口づけされていた。

　柔らかな唇の感触と冷たい感覚が一度に襲ってきて、恵理子は混乱した。

「これで契約完了よ。貴方の夢を叶えるわ」

　女の瞳が七色に煌めき、唇は半月を描いた。

　身体から、ゆっくりと力が抜けて行く。もう自分の意志で立っていることすら出来なくなり、恵理子は床に倒れるようにして眠りについた。

　携帯がバイブしている音で、恵理子は目を覚ました。

身体を起こすと、自宅のベッドだった。

（夢だったのね。ああ、でも思いっきり暴言を吐いたせいか、少しだけ気分がいいわ）

　夢の中での自分の醜態を思い出すと自己嫌悪の念が湧きあがってくるが、どうせ夢なのだから構うものか。あれが、嘘偽りのない本音なのだ。

あんな女は、さっさと死ねばいい。死んでも、どうせ本気で悲しんでくれる奴などいないのだから。男たちはあっさりと別の若い女を追いかけるだろう。

　身支度をしようとベッドから降りると、足の裏がべたついている。

（嫌だ、寝ぼけて何かこぼしたのかしら）

　眉を寄せて足の裏を見ると、何か茶色いものがこびりついていた。指を見てみると、爪の間にも何か茶色のものが挟まっていた。

（何よ、これ？）

　急いでバスルームへ行き足の裏と爪に水をかけると、茶色のよごれは赤い液体へと変わった。

「きゃっ」

　反射的に悲鳴を上げて、恵理子は仰け反った。

（血？どうして私の手足に血がついているのよ？喧嘩でもしたっていうの、でも身体のどこにも怪我なんてしていないし）

　昨夜はどうやって帰宅したか思い出せないし、気がついたらベッドで眠っていた。

それだけ記憶がなければ、何か血がつくような真似をしてしまったのかもしれない。

（靴を脱いで歩いたり、素手で空きビンを割ったりしたのかしら）

　自分が酒も飲まずに暴れ歩いたのだとしたら、誰にも知られたくない話だ。

　恵理子はため息をついて着替え始めた。よく見るとパジャマにも汚れがある。

帰宅してからも、何か騒いだのかもしれない。自分に呆れながら、パジャマを洗濯機へ押し込んだ。

　昨日のことを思い出すだけで吐き気を催すぐらい不愉快な気持ちになるが、人前で醜態を晒すつもりはない。今日、ゆりに会っても笑顔で接してやる。

決して男を盗られたなど周囲に気づかれてなるものか。

　どうやって復讐してやろうか。今日、出勤したら先輩の立場を利用して困らせてやろう。

意地の悪いことを考えながら、自分がさほどいら立っていないことに恵理子は気がついた。何故か胸のつかえが取れたようにスッキリした気分だ。

（何故かしら？あんな夢を見たからかな）

　どちらにせよ、恵理子の足取りは軽かった。ゆりを苛め倒して、敬にはこっちから別れを告げてやろう。若い女に手を出したのだと、学生時代の仲間に言いふらしまくって恥ずかしい思いをさせてやろう。

　うきうきとした気持ちで、通勤途中にある公園へ入った。

　いつもとは違うざわめきが公園を満たしている。恵理子は人だかりがある方へ足を向けた。

　警官が立ち並び、黄色いテープが張り巡らされている。その周囲に人だかりが出来ていたが、皆、一度足を止めて何かを覗き込むとすぐに走り去っていく。

　いきなり人だかりから離れた若い男が駆けてきて、恵理子の横で倒れこむようにして嘔吐した。酸っぱい匂いが辺り一面に漂ってきて、露骨に恵理子は顔をしかめる。吐くほど気持ち悪いなら見なきゃいいでしょ！舌打ちをして、恵理子は人だかりに近づいた。

何があるのか見たいという好奇心を抑えきれなかったし、自分は肝が据わっているから先ほどのだらしない男のように、何を見ても嘔吐などしない自信がある。

　周囲の人々の視線を追って顔を上げると、木の上に髪の長い女性がいた。女性であることは服装と胸の膨らみで分かった。

（まさか降りられなくなったなんて言うんじゃないでしょうね）

　女性は微動だにしない。

　様子がおかしいと思い、集中して見てみると女には下半身がなかった。上半身だけが幹に乗っているのだ。下半身は木の根元で、大の字に開いて置いてある。

　恵理子は反射的にゴミ箱に吐いた。胃の腑が痙攣するほど嘔吐した。

辺り一面に酸っぱい匂いがしたが、それよりも血の匂いが彼女の鼻を刺激した。

「おい、顔がないぞ！」

　刑事のするどい声がして、人だかりから悲鳴が上がる。振り向いた恵理子の視界に飛び込んできたのは、顔の皮を剥がれた女だった。

　よっぽど会社を休もうかと思ったが、昨日のショックで寝込んでいるとゆりに思われたくない一心で恵理子は出社した。少し遅くなってしまったが、言い訳はいくらでも出来る。どんな言い訳にしようかと考えながらフロアに足を踏み入れると、周囲の緊張した空気が恵理子を取り囲んだ。

　明らかに、会社の様子は普段と変わっていた。皆、暗い顔でひそひそと話をしている。

普段から仲良くしている同僚の美香に声をかけると、彼女は驚いた顔で一歩下がった。

「どうしたのよ？幽霊でも見たような顔して」

「あの、恵理子。あんた知らないの？」

　美香は恐る恐るといった口調でたずねてきた。

「何を？」

「内村　ゆりちゃん、殺されたんだよ。あんたの家の近くにある公園で。顔の皮を剥がれていたんだけど、バッグが足もとにあってそれで身元が判明したの」

　恵理子の全身から血の気が引く音がした。

　今朝見た、皮を剥がれた惨殺死体がゆり？

　殺したい、殺したいと憎んだゆり？

「それで、今日はまだ敬さんも出社してないの。昨日、二人で一緒に退社するところを目撃されていて」

　敬の話になり、恵理子は少しだけ理性を取り戻した。

「でも一緒に退社しただけでしょ。別に会社を出た後の行き先が同じとは限らないじゃない」

「違うのよ、二人は腕を組んで退社していったの。もう完全に恋人同士って感じで。だから敬さんが何かを知っているんじゃないかって警察が行方を追っているみたい」

　頭が割れるように痛かった。完全に恋人同士？腕を組んで？

私とは周囲に悟られないように、決して腕組みして退社なんかしなかったのに。ゆりとはしたのだ。

　恵理子の胸は、再び嫉妬の激しい炎に包まれた。

（あんな女は死んで良かったのよ！清々したわ！むしろ犯人に感謝してるわよ！）

　本音をぐっと飲み込んで、恵理子は表情を曇らせた。

「怖いわね。自宅の近くの公園で事件だなんて。引っ越しを考えた方がいいかしら」

　美香の眼が怯えた草食動物のように、きょろきょろと動く。

（まさか私を疑っているの？どうして？私は敬以外にゆりの悪口を言っていないのに）

　フロアの奥にある敬のデスクを見ると、デスクにあるはずのパソコンがない。

　恵理子の視線を追ったのか、美香が口ごもりながら教えてくれた。

「課長が敬さんのパソコンを勝手に見たの。昨日の二人の行動を知ろうとしたらしくて」

　課長は妻子持ちでありながら、不倫の常習犯である。きっと若くて目立つゆりを狙っていたに違いない。先に目当ての女を奪われた腹いせにパソコンを見たのだ。

　そして恵理子の秘密を見つけてしまった。そして同僚や、下手をすると警察にも話してしまった。

　足もとがまたぐらついて、恵理子は壁に手をついた。美香は大丈夫？とも聞いてくれない。

周囲からの視線は恐怖と怯えからくる冷酷なものだった。この緊張感は恵理子を警戒しているからだったのだ。

　疑われているというショックで恵理子はパニックを起こしそうになる。

（どうして、どうしてよ！確かに死ねばいいとは思ったけど、殺してないわよ！敬のことだって知らないわ！）

　敬がゆりを殺したのだとしたら、二人はそれほどに深い仲だったのか？

　考えるだけで身体が、怒りで熱くなる。

　自分は殺してなどいない、それなら堂々としていればいい。殺していないのだから、証拠など出るはずもない。現場が私の自宅付近だった、ただそれだけのことだ。

　急に元気が出てきて恵理子はコーヒーを一口啜ったが、すぐに彼女の元気は打ち砕かれた。厳しい顔つきをした男二人組が、恵理子を呼んだからである。

一般人にはない厳しい雰囲気に、恵理子は二人が刑事であることを名乗られる前に見抜いていた。

　昨日と同じように、恵理子は満員電車の中にいた。苦しいほどに混んでいるが、もう恵理子にはどうでもよかった。

　警察は恵理子と敬の両方を疑って捜査しているらしく、恵理子は昨夜のアリバイをうんざりするほど尋ねられた。

　しかし、どうやって自宅のベッドに戻ったのかすら分からない恵理子にアリバイなどあるはずがなかった。

まだ物的証拠がないので任意同行や家宅捜査をされる心配はないが、このままでは近いうちに解雇されるだろう。殺人の容疑がかかっている女を雇用するような会社など存在しない。

　恋人を失い、職を失うなどという最悪のシナリオは恵理子の人生設計にはなかった。
彼女の考えなら、今頃はもう敬と結婚をして寿退社をして、裕福な主婦になるはずだった。

誰からも羨まれる美貌と富と、容姿の良い夫を持った女として人生を送るはずだったのに、一体どこで何を間違えたのだろう。

（ゆりが間抜けに殺されたせいよ！よりにもよって私の家の近くで死ぬなんて、どこまで嫌な女なのよ！）

　沸々と怒りが湧いてくる。顔の皮を剥がされ、身体を真っ二つにされるという惨い死に方をしても、まだゆりを許す気にはなれない。むしろ、当然の報いだとすら恵理子は考える。

　しかし、敬はどうしてしまったのだろう？

ゆりが殺された時にもし一緒にいたのなら、殺されてしまったのだろうか。

それとも、警察が考えるように敬がゆりを殺してしまったのだろうか。

　どちらにせよ、もう敬には何の価値も残っていない。殺されたのならそれでお終いだし、ゆりを殺した犯人だとしたら刑務所行きで家から勘当されるだろう。

そうなれば敬は一文無しの死刑囚である。結婚する意味がない。

　人ごみに流されて電車から降りたが、昨日と同じようにすぐ帰宅する気になれなかった。

（昨夜見た遊園地、あれは夢だったのかしら？もし現実だったなら少しは癒されるんだけど）

　下を向いて髪をいじっていると、ふっと明るい光が恵理子を照らした。

　七色のアーチが昨夜と同じように、輝いている。

嬉しくなって、恵理子は中へ入った。昨夜の出来事は夢のような部分もあったけれど、この遊園地に来たことは事実だったのだ。

それなら、従業員の誰かが私のアリバイを証明してくれるかもしれない。ダンサーのような若い女に会ったこと以外記憶はないが、こちらが覚えてなくても他の従業員が自分を見ていた可能性がある。

　何しろ自分はとびきり美しいのだから、何人かの男は覚えているはずだ。絶対に。

　職を失わなくて済むかもしれないという期待に胸をふくらませて、アーチをくぐると、昨日と同じように白い扉の前に立っていた。

　目の前には白いドアが空中に浮いた形で安定しており、辺り一面は真っ白な空間になっている。

とてつもなく広い部屋で、四方一体どこも壁が見えない。よく目をこらして見ると、ドアの右横に何か帽子のようなものが一列に並んでいるのが、遠くから確認出来る。

　何が並んでいるのか見てみようと足を踏み出した瞬間、目の前に女が立っていた。

「あっ！」

　足音もなく、気配もなく、まるで魔法のように女はいきなり出現した。恵理子は驚きのあまり、後ずさった。

「あの、私、昨夜もここに来ましたよね？」

「ええ、来たわ」

　女の返事に恵理子は、内心で躍りあがった。これで自分の無実は証明される。

「ゆりという名前の女を殺したいと叫んでいたわ」

　すっと血の気が引いた。

「それは勢いよ。本気で言ったわけではないの。だから警察に話す時は、くれぐれもその話はしな」

「本気でなければ殺せないでしょう。あなた、ゆりという女を殺したじゃない」

　恵理子の話を、女の甘く、そしてどこか冷たい響きを持った声が遮った。

「わ、私がいつ人殺しをしたっていうのよ？言いがかりは止して！」

「昨夜よ」

　頭に血が上った恵理子には、女が何を言っているのか分からない。

「何を言っているの！」

「人殺しをした時間よ。月が輝いている真夜中に、あなたが殺したの」

　黄色に塗られた女の爪が伸びてきて、恵理子の額をつついた。不思議なことに恵理子は動けなかった。

　脳裏にはパジャマ姿の自分が虎のように四つん這いで走り、ゆりの喉笛に噛みついた映像が流れてくる。

喉の皮膚を喰いちぎり、薄くなった部分にさらに噛みつく。ゆりが激痛にもだえて全身を震わせているが、恵理子の体重が重くて動くことが出来ない。

何度も何度も噛みちぎり、肉の無くなった喉を満足そうに見つめる自分がいる。

　そして大きな包丁でゆりの顔から皮を――。

「嘘！私がそんなこと出来るわけないわ。だって今朝は死体を見て嘔吐したのよ、そんな私があんな残虐なこと出来るわけがないのよ」

　呪文のように繰り返し、繰り返し犯行を否認する発言をして恵理子は正気を保とうとした。脳内にある生々しい映像を振り払おうと、必死に頭を振る。歯に肉を引きちぎった感触があるような気がして、口を乱暴に拭う。体中が震えて冷たい汗が噴き出してくる。

「出来るわけないわ、絶対、出来るわけが」

　オレンジの唇に指を当てて、女は悩ましげに足を交差して恵理子を見ている。

「さあ、あなたの望むものよ」

　女が片手を上げると、壁がすごい速さで迫ってきて、女の真横でぴたりと止まった。
先ほど、遠目から確認していた帽子のようなものがかかっている。

そのうちの一枚を取って、女は恵理子に渡した。

「欲しがっていたものよ。良かったわね」

　滑らかな女の手が触れたと思うと、恵理子の手の上には丸くて肌色の紙ぐらいの薄い何かがある。

「いぃぃぃたああぁああいいぃいいいいいいいいいいいいい」

　紙が発した苦悶の声に恵理子は腰を抜かして、その場に座り込んだ。腹の底にまで響く呪われた悲鳴が辺りにこだまする。
みるみる内に紙はゆりの顔になった。いや、最初からゆりの顔の皮を恵理子は掴んでいたのだ。

血を拭い綺麗にされていたために皮膚だと気がつかなかっただけだ。

「からだがぁああわたしのかぁあらだぁあがぁああーいたいぃいいぃいいいたすけてぇえええええ」

　顔の皮膚だけのゆりは大声で泣きながら、助けを求めている。声は妙に抑揚がなく、一定の音程で鳴り響くのが余計に不気味だった。

「嫌ぁあああ！嫌、嫌よ！こんな、こんなことっ」

　喉が痙攣して、ひくひくとおかしな音を立てる。恵理子はもう立ち上がることすら出来ず、必死にゆりの皮からはいずって逃げた。

「あなたの欲しいものは手に入ったわ」

「あんた、狂ってる！人殺し！人殺しよ！こっちに来ないで！」

　必死に目で出口を探すが、扉は女の背後にある白い扉しかない。

『夢が現実になればいいと思ったのでしょ』

　女がいつの間にか現れたソファにもたれかかりながら囁いた。

　その一言で恵理子のパニックは収まった。まるで難しい問題の答えを教えてもらった生徒のように、何もかもが理解できたような気持ちになった。

霧が晴れるようにすっと視界が開け、身体の震えも冷や汗も止まり、恵理子はゆりを見た。

（そうよ、こんな女とっとと死ねばいいと思っていた。若いゆりが死んで私が生き残る、それが私の夢）

「いたあぁああいいぃいいよぉおおぉからだがぁあわたしぃぃのぉおおおお」

　恵理子はピンヒールで思いっきり、ゆりの顔を踏みつけた。

「うるさい！あんたはもう死んだんだから、いい加減黙りなさいよ！生きていた時からずっとあんたはうるさくて大っ嫌いだったのよ！この馬鹿女！娼婦！地獄に堕ちろ！ブス！！」

　ぐりぐりと踏みにじると、皮は沈黙した。

内村　ゆりは完全に恵理子の世界から、全ての世界から消えた。

「ふ、ふふふふ」

　千切れた皮をつまんで投げ捨てると、恵理子の心は平穏に戻っていく。

　もう方法なんてどうでもいい。ゆりが消えるのなら、どんな手段でも構わない。

　気がつくと甘い蜜のような香りがして、女の横に恵理子は腰かけていた。目の前にはいつの間にか現

れたガラステーブルの上に、山もりのさくらんぼがガラスのお皿に載っている。

　さくらんぼを唇で弄びながら、女が恵理子を見た。

　鮮やかなブルーのアイシャドウが目元を縁取っており、瞳は透明に澄んでいる。吸い込まれるように、恵理子は女を見つめた。何の色もない瞳に溶けていってしまいたかった。まるで母親に抱きしめられたいと願う幼子のように。

「さあ、行きましょう。私たちの世界へ」

　柔らかな女の手が恵理子の手に触れる。

女の衣装は黒いドレスから、純白のドレスに変わっていた。亜麻色の髪を彩る花のコサージュ、ウェディングドレスのようなフリルたっぷりのドレス、陶器のような足の先にある花をあしらったハイヒール。

　白いレースの手袋をはめた女の手を、無意識に恵理子は掴んでいた。

「扉を開けていいわ」

　恵理子は扉を開けた。

　花の香りがふわっ、と恵理子を包み込んだ。

　扉の向こうは、草木が生い茂り、青空の下で若い少女たちが真っ白なドレスを着て楽しそうにおしゃべりしたり、追いかけっこをしたり、花を摘んだりしていた。

童話の世界のような色鮮やかな世界で、可憐な少女たちが無邪気に笑い合っている。

　まるで夢の世界のような平穏さと風景画のような優美さに恵理子は胸を打たれて、息を吐いた。

　不意に鐘の音が鳴り響いて、少女たちから歓声があがる。

「ご飯だわ」
「お腹空いていたの、嬉しい」

　口ぐちに話しながら、少女たちは一か所に集まっていく。少女のひとりが茫然としている恵理子の手を引っ張って輪に入れてくれた。

「ご飯の時間だよ、たくさん食べてね」

　無邪気な笑顔を向けられて恵理子は、久しぶりに他人に優しくされたことに感激した。どれほど長い間、他人から笑顔を向けられていなかっただろうか。

ひたすら美しくなることに夢中で、他人などどうでも良くなっていた。

　ガシャン、ガチャン、と何かが激しく跳ねる音がして恵理子はそちらを見た。

巨大な銀の皿に黒い縄で固定された敬が、悲鳴を上げながら現れた。皿は浮いており、自動的に少女たちの輪の真ん中に降りた。

「え、恵理子！助けてくれ、気がついたら縛り上げられていて動けないんだ！」

　敬は恐怖のあまり、顔が真っ青を通り越して真っ白になっている。以前、浮気がばれた時もこの顔を恵理子に向けた。

「なあ、頼む！はやく縄を、ぎゃあああぁ！」

　突如、凄まじい顔で敬が絶叫した。

　少女たちが敬の足に齧りついている。鮮血が迸り、肉が削がれて骨が見える。

　生々しい血の香りに恵理子は俯いて口を抑えた。このままでは敬が殺されてしまう！

「ねえ、美味しいよ。たくさん食べると食べた分だけ若返ることが出来るんだよ」

　隣に座った少女が優しい声音で話しかけてくる。悪意も敵意もない無邪気な声だ。

　――若返る？大金をいくら注ぎ込んでも効果がなかったのに？肉を食べるだけで？

　恵理子は期待と怖れが入り混じった瞳で、かぶりついた少女を見た。

　かじりついた少女は見た目二十代半ばに見えたが、肉を飲み込んだ時には十代にしか見えなくなっていた。少女の口から、大量の赤い液体が滴り落ちる。恵理子の眼が大きく見開かれる。

（美しく、いつまでも美しくありたいのよ！）

　頭の芯がじんと痺れていく感覚がする。

　次々と少女たちが敬に喰らいついていく。

「あぁぁあ、ぎあぁぇえ、頼むよぉあ、恵理子ぉおおお！」

　敬の絶叫が恵理子の耳にこだまする。金縛りが解けたように恵理子は身体を起こした。

「敬」

　恵理子は敬の顔を覗き込む。

「た、助けてくれるんだな？ああ、俺はお前だけだよ、愛してる、愛してる、恵理」

　最後まで言い終わらないうちに恵理子は、敬の唇に噛みついた。そのまま舌まで歯で挟み込むと、ありったけの力で噛みちぎった。

　噴水のような血が口内に広がるのを感じて、恵理子は笑った。ゴクンと飲み込んだ瞬間、恵理子の身体は十代の瑞々しさを取り戻していた。

　数日後、高橋　恵理子の遺体が自宅のベッドで発見された。
彼女はまるで夢でも見ているかのような、安らかな顔で死んでいた。
北島　敬の行方は杳として知れない。

　劇場が燃えている。青年は茫然と炎を見ていた。

あの劇場の中で、女性も燃えてしまっているのだろうか。

　絶世の美女である彼女が劇場に現れたと同時に、突然死する若い娘や、惨殺死体になって発見される若い娘の事件が倍増した。娘の身体は二つに千切られて、顔の皮がなくなっていた。

　次第に人々は彼女を恐れるようになった。血ぬられたように赤い唇が、人の生き血を飲んでいるように見えてくるほどに、彼女からはおぞましい空気が放出されていた。

　ついに過激な住民が、劇場に火をつけてしまった。次にどこの若い娘が殺されるか分からないという緊張感が頂点に達した故の事件だった。

　この世の者とは思えないほど美しく、輝いていた女性。夜空に浮かぶ月だと思ったが、彼女は月どころか人の心を焼きつくす太陽だったのかもしれない。

　ふっと廊下に人影が見えて、青年は声を上げた。

　燃え盛る炎を背景に女性が微笑みながら立っている。

「次のショータイムをお楽しみに」

　唇がそう動いたのを青年は見たが、次の瞬間には女は炎の中に消えていた。

ナイトメア

http://p.booklog.jp/book/23899

著者：森山
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/next7/profile

表紙画像：戦場に猫≪いくさばにねこ≫様
http://catinthedeath.web.fc2.com/index.html

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/23899

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/23899